

私はレオナルド・ダ・ヴィンチでした。魂を売ります。天国を売ります。

橋本 聡 2013年4月6日～5月4日 青山 | 目黒

パフォーマンスを中心に活動する、日本の若手作家・橋本聡の個展が、現在東京の中目黒にある「青山 | 目黒」で開催されている。橋本は、美術館やギャラリーに限らず、都市の公共的な場所やオルタナティブなアールスペースなどの様々な場所で独自の活動を行ってきた。彼の活動では、ときに鑑賞者をギャラリー内部に閉じ込めたり、彼の私物を鑑賞者の持ち物と交換することを迫ったり、鑑賞者がインストラクションに従ってなんらかの行為を行うことなどが行われる。橋本の作品を経験することにおいて、鑑賞者は透明かつ中立的な立場であることができず、ときにアーティストの脅迫的な行為によって、特定の「関係」を強いられる。美術作品を無邪気に鑑賞するという態度は、そこでは不可能である。すなわち、橋本の作品を経験することは、心理的・身体的な負荷を含めた「エコノミー」に巻き込まれるということだ。

今回の個展は、橋本には珍しく、現代美術ギャラリーを会場にして行われるものである。それが意味するところは、多くの作家がそうであるように、作品を「売買」というファクターが新たに介在してくるということだ。しかし、上述したように、橋本はこれまでもアーティストと鑑賞者（参加者）とのあいだで取り交わされる交換の体系に関心を抱いてきた。だが、今回の個展において、彼が焦点を当てた交換の形態は異様である。

展覧会タイトルは「私はレオナルド・ダ・ヴィンチでした。魂を売ります。天国を売ります。」。展示の内容は、このタイトルに明言されている通りである。橋本が、自身が実はレオナルド・ダ・ヴィンチであったことを告白し、レオナルドが所有する天国の土地と魂を売る。にわかには信じ難いこの事実を証明するために、橋本はレオナルドの作品の秘密を明らかにすることで、その事実を証明しようとする。橋本がレオナルドの絵画を解析するナレーションやインタビュアーとの会話の様子がビデオに記録され、会場では天国の土地を売買する契約書が展示されている。しかも、そのビデオにおいて、橋本は過去にレオナルドであったばかりか、後に、日本近代洋画の巨匠である高橋由一であった時期もあることを語り始める。

私たちはこの事態を前にして、いくつもの真偽の不確かな位相に引き裂かれていく。そもそも実在を確かめることのできない天国や魂を売買することは可能なのか。もしその契約書を誰かが買ったとして（実際に売っていたが）、彼はその天国の土地の権利を買ったことになるのだろうか。それとも橋本の「作品」を買ったことになるのだろうか。そもそも、橋本は本当にレオナルドや由一だったのだろうか。果たしてこの展覧会を開催する動機自体、橋本が自身の転生を証明するために開催したものなのか、あるいは生活に困窮する作家が作品を「売買」するためにでっちあげた虚偽の言明なのか、あるいは美術史的な新事実を発表するためのものなのか、あるいは新作の制作と発表のアリバイとして捏造されたものなのか、あるいはたんなる妄想なのか……。そうしたことのすべてを、確かめるすべはない。

文/ 沢山 遼